

## ディケンズの性格描写の発展

——遊離から関連へ——

平野 絹代

### I

ディケンズの小説は前期と後期に大別されるが、その違いを次のように概括的に把握することが出来よう。まず作品の世界に関しては前期は散漫、後期は緊密、強力、統一的である。ロバート・ギャリスはディケンズの後期の作品の世界を“the world as almost totally in the grip of a gigantic conspiracy... of which the sole effect is to thwart and stifle human freedom”<sup>(1)</sup>と表現しているが、この‘gigantic conspiracy’は後期を特徴づけるものである。これは一般に社会悪の総合であり、後期では個々の社会悪が緊密に相関連又は連帯して作品を支配する一つの強力な力となっているのである。一方前期においては、社会悪は作品に充満しているが、それらは個々の悪にとどまり結びついて強力な力にはなっていない。こういう異なる世界において、性格描写について又次のようなことが言える。前期の人物には自由さ、天真爛漫さがあるのに対して、後期の人物は自由さに欠ける。前期の人物は後期のような人間性をゆがめる強力な力の支配する世界に住まない為に自由勝手に行動し、その本来の魅力を思う存分に発揮している。一方後期では、世界が人物に対して勝ちを占め、その自由な行動力を抑えてしまった。

具体的に、後期に視点を置いて、前期から後期への人物又は性格描写の変化を考えてみよう。第一の変化は前期の人物の縮少である。前期の巨大な人物ベックスニフやミコーパーはハロルド・スキンボール、ボールズのように卑少になり、あるいは小鬼化し、ニコラス・ニクルビーのような快男児はアーサー・

クレナムのような影のうすい存在となっている。もう一つの変化は以前とは性質を異にする人物の登場である。これは *Dombey and Son* (1847-8) に始る。この作品は時期的には前期に属する<sup>(2)</sup> が、その世界においても、性格描写においても後期の特徴を備えている。前期の場合、善人と悪人ははっきり区別され、意志を阻害するものは敵のその外なく、まるで空気のように自由に行動する。一方この作品では、善人と悪人を一人の人物に統合し、周囲（他の人物やシチュエーション）に反応して行動させようとする試みが二・三の人物に対してなされている。実行されなかったが、作者が純良なウォルター・ゲイを墮落させようとした<sup>(3)</sup> のもこの一環であり、ドンビーとエディスの場合はこの点明らかである。彼らも前期の人物によくあるように、利己性あるいは高慢等の著しい特徴をもっているが、前期の人物が唯それのみに従って行動するのに対して、彼らは良心の呵責のような反対要素も同時にもっている。そこに心の葛藤が生じ、これまでと違って内面が周囲に反応出来る条件が生ずる。だからベックスニフやクイルプがエゴイズムを楽しんで追求するのに対して、彼らの場合それは苦悩の原因となり、却って束縛になる。そして神経質な精神状態を呈するのが、彼ら以下彼らの発展たる後期的人物の特徴である。

## II

ディケンズは、ドンビーの性格上の変化がスクルージのように唐突であるという非難に対して次のように弁護している。

Mr. Dombey undergoes no violent change . . . . A sense of his injustice is within him, all along. The more he represses it, the more unjust he necessarily is. Internal shame and external circumstances may bring the contest to a close in a week, or a day; but it has been a contest for years . . . .<sup>(4)</sup>

つまり心の葛藤によってドンビーは前期の人物であるスクルージとは違うのだというのであるが、この心の働きこそ後期的人物を前期の人物と区別せるもの

である。ここで心理の動きの原因に ‘internal’ と ‘external’ の両要素が考えられているが、この両者の関係は今後のディケンズの性格描写の発展を調べるに当って、注目すべき点である。こうして人物の心理が分析され描写されることになるが、ディケンズは前期においても心理描写に興味がなかったわけではない。*Pickwick Papers* 中の挿話や、サイクス、フェイギン、バーナビー、ジョナス・チャズルウィット等の人物に特殊心理、特に犯罪心理を描いた。しかしそれは犯罪後の恐怖等の心理の断片に終り、人間関係に起る心理ではないので、ここに扱おうとしている意味での心理的性格描写はドンビーに始ると言えよう。

まず前期の人物を考えると、彼らは夥しい数を成して社会を構成しているが、それは全く異質的な人物の寄り集りだけの感を与える。彼らはお互いに何の内的影響も受けず与えず、ただ各々定められた性質と役割に従って行動するのみである。オリバーは悪党の社会に交わりながら最後までその清い性質を失わないばかりか、言葉使いも上品なままである。ピクウィック、サム・ウェラー、ギャンプ、ベックスニフ、ミコーパー等のいわゆる奇人は終始タイプともいべき性質に従って行動し、内的反応としての複雑な行動はしない。これは善人と悪人がはっきり分れているような世界ではそうならざるを得ないかもしれない。このように周囲が人物の内面に影響を与えず、それ故に内的反応としての行為がなされない状態を副題につけた「遊離」という言葉で表わすことにして、これから人物の行為の内的原因を作品順に<sup>(5)</sup> 分析して周囲と内面との関連の度合を考えながら、後期的人物の心理的性格描写がいかに関連したかを追ってみよう。

### III

ディケンズは *Dombey and Son* について “it was to do with Pride”<sup>(6)</sup> と言っているが、このプライドは主人公ドンビーとエディスの性格描写の中心となるばかりか、後の後期的人物においても最も重要な要素である。そしてこれ

が前期的人物には殆んどみられない内面と周囲との交渉の仲立ちとなっていることを考えればこの発言の意義は充分認められるであろう。プライドの性質や役割は作品毎に変わっていくが、これを考えながら議論を進めよう。

*Dombey and Son* は大会社の経営主ドンビーが商業的価値を絶対視し、人間的愛情を認めなかったのが、娘への愛情を目覚めさせ、この考えを改めざるを得なくさせる事件が色々起って、行きついたところでやっと温い心の人間になる物語である。これは筋だけ述べればお伽話的なスクルージの物語と大差ないが大いに違うところは、ドンビーの心と周囲の人物や事件との間に摩擦があることである。最初心の内で娘への自分の行為が不正であることを感ずるところから始まるが、我儘とも言えるプライドがそれを素直に認めようとしないうちに、心の葛藤が生ずる。ところが妻の死、一人息子の死、後妻の反抗等大商人としてのプライドが傷つく事件が次々に起り、そのとぼっちりが前々から不安の対象であった娘に当り益々娘に対して不正に陥る。自分を正当化したいという気持が、娘を悪く思うという否定的な方向に働くからである。そして娘への嫉妬、憎悪へと向う。その間の微妙な心の動きが、娘に咎められるような気がして不安になったり、眠ったふりをして顔に被せたハンケチの隙間からそっと娘を眺めたり、妻に欺かれた腹いせに娘を殴って追い出したり、最後に娘を愛するようになってからもこちらから折れて出るのはプライドが許さない等の一連の行為に反映している。以上のようにプライドはドンビーを周囲に反応さすべき心理の中心を成していることがわかるが、これによってドンビーは前期的人物と違うのである。ここでプライドがいかなる意味で使われているかを考えよう。娘に対する自分の行為が不正であると感じたり、自己を正当化したいという気持に現れるプライドは「自尊心」である。この場合に現れる行為はリアルに心理を表現している。しかしドンビーにはプライドが「高慢」の意味で使われることが多いところに問題がある。商人としての最後まで頑として折れることを知らぬプライドがそれである。その為にドンビーにはどこか観念的なところがあって、前期的人物の特徴であるタイプのな姿が漂っているのである。

次の引用はドンビーの愛情の萌しが強力なプライドに抑えられてしまった状態を述べたものであるが、プライドという言葉の誇張や文体はそういう観念的なもの、写実性からの程遠さを感じさせるだろう。

It may have been that in all this there were mutterings of an awakened feeling in his breast . . . . But he silenced the distant thunder with the rolling of his sea of pride. He would bear nothing but his pride.<sup>(7)</sup>

この作品のもう一人の人物エディスは、ある意味でドンビーより一步前進した面をもっている。それはドンビーには観念的なものが大であるのに対して、エディスの場合は全く精神的であるということである。彼女は不満と恥辱の積み重ねの生涯に神経病的になっており、自己に対しては自己軽蔑的、他に対してはプライドを傷つける者に対して被虐待意識が強く、反抗的である。そしてドンビーの娘を愛することによってそれを抑えようとする葛藤は、ドンビーに欠ける心の温かさ、情熱も併せて、エディスという人物にドンビーに優る複雑性を与えている。しかし畢竟この葛藤は失敗に終るのであって、神経病的な絶望感が次の彼女の独白的な言葉によく現われている。

‘I have dreamed . . . of a pride that is all powerless for good, all powerful for evil ; of a pride that has been galled and goaded, through many shameful years, and has never recoiled upon itself . . . .’<sup>(8)</sup>

どうにもならないという気持がいわば‘dream’となって彼女にとり憑いているのである。しかしここでも上記の引用(7)と同じようにプライドという言葉に強調が見られる如く、プライドは「高慢化された自尊心」となって幅をきかせ、エディスのリアルな心理描写に誇張と歪を与えている。その強調された「高慢」の為であろうか、彼女の言行は往々にして舞台を連想させ、相当自然さを損ねている。

以上のようにドンビー、エディスいずれの場合もプライドが心理描写の中心となっている。それは「高慢」と「自尊心」の両意をもつが、彼らの場合前者

が大であるところに観念的あるいは芝居的になるという不自然さが生ずる。しかしとりわけ彼らの「自尊心」は対人関係における人間の種々の心理（心の疚しさ、劣等感、恥辱等）の原因であり、それあるが故に彼らは周囲と関連を結んでそれに反応して行動するようになったのである。かくして彼らは後期的人物の出発点を成す。

#### IV

*Hard Times* (1857) では *Dombey and Son* におけるほど念の入った心理描写はされてないが、その為にか却って強調や誇張が少く、ずっと自然になっている。さらに後の作品 *Great Expectations* (1860-1) に繋がる新しい要素ももっている。トムについては後に触れるが、ここではドンビーやエディスの発展とみられる主人公ルイザについて述べよう。彼女もやはり、情に欠けた人間から情の豊かな人間になろうと葛藤を行なうが自身のプライドがそれを妨げると同じ型を踏んでいる。父親からバウンダビーとの結婚話を持ちかけられた時勧められるままに承諾するのも、一つは弱みを見せたくないというプライドの為であり、友のシー・ジュープやその他の人に冷淡にし、平静を装うのは、自分の不幸を知られたり同情されたりすることによってプライドを傷つけられたくない気持からである。こういう彼女の行為には「高慢」も一部見られるが「自尊心」の方が大きく、周囲への反応は自然で、その他の点でもドンビーやエディスにおけるような極端さがないので不自然さはあまり感じられない。次のルイザの言葉はエディスと似た心境を語りながら上の引用(8)あるいは(7)より具体的であることがわかるだろう。

I am so proud and hardened, so confused and troubled, so resentful and unjust to every one and to myself, that everything is stormy, dark, and wicked to me.<sup>(9)</sup>

さらに、つまらぬ自尊心から親しむべきシー・ジュープに冷淡になったり、思知らずの弟の為に犠牲になったり、気の毒なステファン・ブラックプールに

同情したりする等の相手によって矛盾せる彼女の態度にはドンビーやエディスを越えて *Great Expectations* のビップに繋がる多面的な要素がある。

*Little Dorrit* (1857-8) は心理描写において *Dombey and Son* の継続と思われるほどこの作品から出発したものがそのまま大きく発展させられている。すなわち、ドリット、ミセス・クレナム、ミス・ウェイド等の神経病的な人物はすべてドンビーとエディスに原型をもち、意識がさらに深く掘り下げられ心理表現もずっと具体的になっている。

ドリットは長年の牢獄生活によって自分のことしか考えない利己的な、精神的に不健康な人間になってしまっている。そして傲慢な態度をとるが内心絶えず劣等感に脅かされ、他人の言行にすぐ自分への軽蔑を見出してプライドを傷つけられる。例えば牢番に軽率にあしらわれると、自己疎外の念に襲われて次のような自暴自棄なことを言う。

‘What does it matter whether I eat or starve? What does it matter whether such a blighted life as mine comes to an end...? What am I worth to any one? A poor prisoner, fed on alms and broken victuals; a squalid, disgraced wretch!’<sup>(10)</sup>

そうかと思うと、すぐその後で吹聴そして自己憐憫に陥る。

‘And yet I have some respect here.... Go out and ask who is the chief person in the place. They’ll tell you it’s your father. Go out and ask who is never trifled with.... They’ll say, your father.... Well then.... Is your father so universally despised?... Will you have nothing to remember him by, but his ruin and decay? Will you be able to have no affection for him when he is gone, poor castaway, gone?’<sup>(11)</sup>

彼がオールド・ナンディやフレデリックの貧乏や病弱に同情しパトロンぶるのは実は自らがそうであるという意識(劣等感)を和らげる為である<sup>(12)</sup>。自分の

行為に対して疚しさを感じ、責められないのに責められるような気がして  
 “There was a reproach in the touch so addressed to him that she had not foreseen . . . He began to justify himself . . .”<sup>(13)</sup> のように娘に自己弁護する場面もある。以上の例によって充分わかるようにドリットに著しいのは「他」(すなわち、周囲)の意識である。これまでの人物にもそれはあったが対象が限られ、(ドンビーは被害者である娘に、エディスは加害者であるドンビーとカーカーに、ルイザは友のジュープに対して見られる)、ドリットほど絶えず敏感に働いてはいない。彼は彼らより自意識が病的に強く、その為に「他」の意識が強いのである。作者が “his poor weak breast, so full of contradictions, vacillations, inconsistencies”<sup>(14)</sup> と言っているように、ドリットの心理の動きは最も激しく複雑である。

ミセズ・クレナムやミス・ウェイドも同じく「他」の意識が強い。ミセズ・クレナムは宗教の名を借りてやった過去の自分の卑劣な行為に罪意識を感じて、自らに対しては罪滅しの生活によって自己弁護するが、犠牲者の一人である息子にその積りなく偶然咎められると怒り出し、やはり宗教的な言葉で弁護する。

But let him look at me, in prison, and in bonds here. I endure without murmuring, because it is appointed that I shall so make reparation for my sins. Reparation! Is there none in this room? Has there been none here this fifteen years?<sup>(15)</sup>

ミス・ウェイドが世間に疑いを抱いて人の悪意を見出そうとするうちに自ら自己疎外に陥り、最後に自分が恨む人の苦勞を眺めることに喜びを見出すようになるのも、病的な「他」の意識の為である。

以上のようにこれらの人物には劣等感や罪意識が強く、ドンビーらの高慢的な「自尊心」もここでは虫食まれた「自尊心」となってより病的な反応をしている。そして内面は周囲との関係を深め、その反応はよりこまやかになっている。



## V

以上のようにドンビーからドリットまで、人物の周囲に対する反応はこまやかにになり、内面と周囲の関連性は深まってきている。しかし今一度両者の関係を考えてみると、周囲は内面に本質的な影響を与えてその反応を受けるというよりむしろ、心理を表わすべき行為を引き出す為の媒介のように思われる。ドンビーにせよ、ドリットにせよ、心の不安や痛手を受けるのは主として自らの心的態度に因る。ミス・ウェイドは自らを‘self-tormentor’と呼んでいるが、それはそのまま彼らに当てはまり、彼らは周囲に傷つけられるというよりむしろ、周囲を勝手に解釈して自ら傷ついているのである。この一方性の為に、彼らが「他」の意識の深まりによって益々周囲に反応して行動するようになりながら、依然一人芝居をしている感を与えるのである。つまり周囲は彼ら人物を主観としてみれば、ドンビーからドリットになると、益々内面と深い関連を結ぶようになるが、客観的に見れば両者の本質的な関連はあまり深まっていない。

しかしこれまでの作品にも周囲が内面に及ぼす真の意味での影響と反応が描かれていないわけではない。*Hard Times* 中のトム・バウラーの行為は子供時代の養育方法への反動又ははげ口として領かれるし、*Little Dorrit* 中のミス・ウェイドがひねくれた人間になる過程はリアルに描かれている。すなわち彼女は子供時代に孤児として子供仲間から特別視され、その孤独を埋め合わせる為に激しく愛した女の子に裏切られ子供心に傷つけられて、次第に世間を疑いの目で見ようになりひねくれた人間になっていく。これは挿話であるが、小説の内容の中で発展されたら、興味深いものになっただろう。

## VI

こういう周囲の内面への影響と内面の周囲への反応、すなわち周囲と内面との直接的な交渉という点では、*Great Expectations* (1860-1) はディッケンズの作品中最も充分になされている。それは第一にこの作品では善人と悪人との差が

少くなったことに因る。これまで見てきた人物は大抵片寄ったエゴイストであるし、その周囲には前期的な人物、傷つけられることや疚しさを知らぬ限りない善人や良心の呵責を感じることの出来ぬ天才的なエゴイストが沢山いるが、そういうところにも彼らが一人芝居しなければならぬ原因があろう。一方この作品のピップは、本来善良であるが、囚人が礼を欠いた振舞をするのを見て、“As I really think I should have liked to do myself, if I had been in their place and so despised.”<sup>(16)</sup> と言っているように底抜けの善人でなく、場合によっては恩人を裏切ることとする。善良そのもののジョーもピップの尊大な態度に傷つけられる自尊心をもち、兇悪なマグウィッチも接し方によっては優しく恩を感じず人間になり得る。第二の原因はプライドの性質の変化である。これまではいわば「意識的な自尊心（つまり周囲が意識に働きかける場合にひき起される自尊心）」であった。ここではそれが人間関係にもっと一般的且つ基本的ないわば「無意識的な自尊心（つまり周囲が無意識に働きかける場合にひき起される自尊心）」になり、人物の行為は直接反応的となった。

ピップは同じ年頃の小貴婦人エステラに田舎者の様子やカードの呼び方で嘲られ、一人前に扱われなかったことで子供心に傷つけられて、次のように行動する。

But, when she was gone, I looked about me for a place to hide my face in, and got behind one of the gates in the brewery-lane, and leaned my sleeve against the wall there, and leaned my forehead on it and cried. As I cried, I kicked the wall, and took a hard twist at my hair ; so bitter were my feelings, and so sharp was the smart without a name, that needed counteraction.<sup>(17)</sup>

彼の紳士になりたいという熱望は第一にこの傷つけられた気持から来る。紳士になる為には恩人ジョーやビディを見捨て、今度は彼らを傷つけることになる。以後は呵責の念と自らのエゴイズムとの間の葛藤に悩まされながらも何やかやと自己弁護をみつめて彼らから離れていくのはドンビーらと同じ型を踏襲して

いるが、葛藤に負けながらも絶えず “a penitential codfish and barrel of oysters”<sup>(18)</sup> 式的後悔が頭を出すのはピップという人物を特に複雑にしている。というのはこれまで見てきた人物は、ドリットやエディスのように全く後悔しないか、ドンビーのように破局が訪れて始めて後悔するかどうかであるからだ。周囲の人物に対してピップは、その態度や事態に応じて *Hard Times* のルイザに見られたような矛盾した反応をし、マグウィッチから送られてくる同じ大金でもってハーバートを助ける親切心を持ちながら、ジョーについて “If I could have kept him away by paying money, I certainly would have paid money.”<sup>(19)</sup> と言うことも出来るのである。ハーバートはピップについて “A good fellow, with impetuosity and hesitation, boldness and diffidence, action and dreaming, curiously mixed in him”<sup>(20)</sup> と言っているが、この性格上の ‘mixture’こそ作者ディケンズがドンビー以来試み、追求したであろう。しかし心理描写が次第に複雑になってきたとはいえ、ともすればこれまでの人物には利己性が強調され過ぎる等、‘mixture’に片寄りが見られた。ドリットもこの点おおいに当てはまる。ピップに至って複雑さに加えて均衡も得たのである。

囚人マグウィッチがピップを紳士にしようとするのは世間に抑えられてきた者の心理から出ている。その直接の動機は、人として取扱われたことのない彼が幼いピップの汚れない心の温さに触れた為に限りない恩を感じ、恩返しをしようとしたことである。もっと重要な意識下の動機は、一生下積みの生活をしてきた為に、又ある紳士に利用されてみじめになった為に、紳士に対して憧れやコンプレックスを抱いており、ピップを代理に紳士にすることによってそれを和げる代償としたかったことである。彼はピップに言う。

‘And then, dear boy, it was a recompense to me . . . to know in secret that I was making a gentleman. The blood horses of them colonists might fling up the dust over me as I was walking; what do I say? I says to myself, “I’m making a better gentleman nor ever *you*’ll be !”

When one of 'em says to one another, "He was a convict... and is a ignorant common fellow... I says to myself, "If I ain't a gentleman, nor yet ain't got no learning, I'm the owner of such...."<sup>(21)</sup>

ミス・ハヴィンガムが人の心を貪るように傷つけて喜ぶのは、過去に裏切られて心に大きな傷を受けたことへの代償であり、*Little Dorrit* 中のミス・ウェイドの病的な心理の発展である。オーリックのピップに対する復讐的行為は、彼の“he [=自分のこと] was bullied and beat.”<sup>(22)</sup> という言葉に現われているように出世と結婚の邪魔をされたという妄想的被害意識からやってくる。

*Little Dorrit* では意識の深みまで掘り下げられたが、*Great Expectations* では無意識にまで達している。そして周囲は内面に真の意味での影響を及ぼし、内面はそれに対して直接的反応をし、これまでの一方性がなくなって、両者の関連性は最も深まっている。

## VII

以上、ドンビーより始る一群の後期的人物の心理的性格描写を見てきたが、意識はさらに深く掘り下げられて、最後には無意識の領域にまで深められた。そして人物の内面の周囲に対する反応は益々こまやかになり、両者の関連性は深まった（因に関連性や緊密さは、構成やイメージの面でもディケンズ後期の小説の一般的特徴である）。そして性格描写は益々現実的になっている。この反応の動機となるのはプライド（自尊心）であり、これあるが為にドンビーやエディスはもはや前期的な人物ではなくなるのである。前期的人物はタイプともいべきある著しい特徴に従って行動するので周囲との心理上の関連はなく遊離の状態にある。それが人間関係に基本的なプライドによってドンビーらは始めて周囲との関連を結ぶのである。しかしプライドはもう一つ別の「高慢」の意味にも使われ、*Dombey and Son* ではこれが強調され過ぎた為に非常にリアルな面を含みながらも観念的、芝居的な不自然さを招いた。*Hard Times* 以後この不自然さが改められて行く。*Little Dorrit* は *Dombey and Son* の試み

の充実とも言えるほど、そこで始められた意識の問題が複雑さと具体性を増して発展させられている。そしてより強い「他」の意識によって内面は周囲への反応を増し、両者の関連は深まった。しかしこれまでは一般に周囲は内面に本質的な影響を与えるというよりむしろ、内面にすでに反応すべく存在している心理を行為に引き出す媒介の役目をしている。その為に彼らには一人芝居をしているような感じがあり、内面と周囲との関連性には一方的なものがある。この内面と周囲との交渉が充分に行われるのが *Great Expectations* であり、ここではプライドは「無意識的自尊心」となって行為が直接反応的になっている。かくドンビーからピップまで内面と周囲との関連性は深まって行き、ドンビー以前の遊離の状態から関連性の深まりは、小説家ディケンズの現実性の深まりと、後期の性格描写の発展の足取りである。

## 註

- (1) Robert Garis, *The Dickens Theatre* (Oxford University Press, 1965), p. 97.
- (2) ディケンズの作品は普通 *Pickwick Papers* (1836-7) から *David Copperfield* (1849-50) までを前期とされ、*Dombey and Son* (1847-8) は *David Copperfield* のすぐ前に書かれた作品である。
- (3) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: Cecil Palmer, 1928), p. 473.
- (4) *Dombey and Son* の Preface.
- (5) 作品順といっても、後期的人物のあまりいない、いてもあまり目立たない存在である作品、*Bleak House* (1852-3), *A Tale of Two Cities* (1859) は除いた。又、*Our Mutual Friend* (1864-5), *The Mystery of Edwin Drood* (1870, 未完) では *Dombey and Son* のエディス、*Little Dorrit* のミス・ウェイド、ミセス・クレナム、*Great Expectations* のミス・ハヴィッシュに萌しを見せている性的マニアがヘッドストーンとジャスパーという人物に展開されているが、これは特殊心理であり、これらの二作品はその他の点での発展が見られないので取り扱わなかった。
- (6) John Forster, *op. cit.*, p. 471.
- (7) *Dombey and Son* (Oxford University Press, 1964). 以下ディケンズの作品は

すべて The New Oxford Illustrated Dickens (1953-64) からである。),  
p. 562.

- (8) *Ibid.*, p. 611.
- (9) *Hard Times*, p. 225.
- (10) *Little Dorrit*, p. 227.
- (11) *Ibid.*, p. 228.
- (12) A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens* (London: Collins, 1961), pp. 152-3.
- (13) *Little Dorrit*, p. 479.
- (14) *Ibid.*, p. 639.
- (15) *Ibid.*, p. 50.
- (16) *Great Expectations*, p. 215.
- (17) *Ibid.*, p. 57.
- (18) *Ibid.*, p. 233.
- (19) *Ibid.*, p. 206.
- (20) *Ibid.*, p. 234.
- (21) *Ibid.*, p. 306.
- (22) *Ibid.*, p. 405.